

---

**キーパーソン(KP)が超高齢者の親である症例への対応**

---

医療法人衆和会 長崎腎病院

○松本めぐみ 中村美帆 中村麻美 白井美千代 澤瀬健次 船越 哲

**【はじめに】**

現代社会においては、平均寿命が延長する一方で、社会保障制度の充実とともに未婚率や単身世帯は増加している。今回我々は、独身の透析患者が社会生活不能となり、主たる介護者・KPである超高齢者の親が患者を看取った3例を経験したので報告する。

**【症例1】**

60歳代女性、1979年に血液透析導入、長期透析による重度で多彩な透析合併症を有している。唯一の家族でKPである80歳代の母親が認知症を有していたためケアマネージャー・MSWが介入し、病院で死亡した。

**【症例2】**

60歳代男性、糖尿病のために2008年に血液透析導入、合併症に糖尿病性網膜症あり。高齢で認知症の母親がKPであったが、最終的には歳の離れた2人の姉がKPとなり、本人の希望により自宅で死去。

**【症例3】**

60歳代男性、糖尿病のために1998年に血液透析導入、脳出血後右麻痺や両下肢ASOのために寝たきりの状況。KPは比較的裕福な90歳代の両親で、病院敷設の特養に入居。両親は相次いで死亡したため、姪・後見人が介入し、患者も特養で死亡した。

**【考察】**

KPが超高齢者の場合、現実的な判断や行動は困難な場合が多く、早い時期からKPと社会的資源を繋ぐ援助が必要と考える